

## 北海道の天理教①

北海道には教会が95カ所余りもある（立教175年8月現在）。北海道より多いのは3教区のみで、大阪が1,600余、兵庫と東京が1,000カ所を超える。大阪、兵庫、東京はいずれも人口が多く、大阪、兵庫は教会本部から近い。3都府県に教会が多い理由は納得できる。しかし、北海道にこれほどの教会が出来たのはなぜだろう。北海道も人口は多い。しかも面積は九州と四国を合わせたよりかなり広い。人口と面積を考えると教会がたくさん存在する条件に適っている。しかし、教会本部から遠隔の地であってこれほど多いのは、やはりなぜだろう。

『天理教教会所在地録』（立教173年版）の北海道教区を見ると、北海道に部内教会を持つ「大教会」の数が多いことに気づく。現在、全教の大教会は159カ所である。その内、北海道には95もの大教会が『天理教教会所在地録』の直属教会欄に記されている。すなわち北海道に1カ所以上の教会を有している大教会が95カ所もあることになる。これは全大教会の6割に及び、他の県（教区）でこんなに多い所は見当たらない。これは何を物語るのであろう。

95大教会の所在地は東北から関東、北陸、中部、近畿、中国、四国、九州の日本全域に及ぶ。もちろん大教会から直接伝道された訳ではない。しかし大まかに考えて、全国各地から北海道への伝道がなされたと考えていいのではないか。これは、日本が近世から近代へ向かう過程で、国を挙げて北海道開拓に取り組んだことと密接に関係していると思われる。

江戸期、北海道は蝦夷地と呼ばれ、和人は渡島半島松前付近に住み、その他はアイヌの人たちが住む大地だった。明治2年、明治政府は開拓使を置き北海道開拓を始めた。移民奨励や屯田兵制などにより、農業、漁業が盛んになり急速に北海道に移り住む人が増える。それまで人が住むのは主に沿岸部であったが、交通や通信施設を整備し、紡績、麦酒製造、缶詰製造など近代的工場が増え、内陸部の開発も進み人口が増加した。

北海道へ移住したのは東北と北陸の人が多かった。合わせると7割ほどになるという。続いて徳島と東京も多く、他にも日本の全地域から移住者があった。

北海道へ移住した人の中には天理教の信仰者もいた。郷里で入信し、北海道へ渡った後も助けられたことを忘れず信仰を続け機会があれば布教もした。

北海道各地に開拓村ができ、町が形成されると内地の布教師が先住の知人を頼って布教に訪れた。北海道は日本のどこから見ても海を隔てた遠隔地である。内地での伝道の場合もそうだが、遠隔地布教では縁故を頼って布教地へ赴くことが多い。

明治20年代から30年代の北海道民は多かれ少なかれ開拓と所縁のある人であった。開拓のため入植した人が布教師になったり、開拓の先住者を頼って布教師が北海道にやってきましたり、北海道の伝道の初期は「開拓」と切り離せない。

では、北海道に初めて天理教の教えが伝わったのはいつのことであろう。現在その痕跡がなく分かりにくいのが、おそらく北前船によって伝えられたのが最初であろう。北海道開拓と直接の関係はないが、明治10年代北前船の船頭だった土佐卯之助や河内福蔵が小樽近辺に天理教を伝えた。

土佐は撫養分教会（現大教会）初代会長になる人であるが、明治12年大阪の木津川河口、三軒家で入信。明治13年と14年に北前船で北海道に渡った。『撫養大教会史第1巻』には明治13年の航海時、小樽近くの塩谷港で布教したと記され、翌14年も北前船に乗り、奥尻島付近で遭難の危機を神様から護られた。この時も塩谷や小樽に不思議な話は伝わったと思われる。

河内福蔵も北前船の船長だった時、三軒家で入信した。明治10年代であろうか。入信後の北海道航海は天候に恵まれなかったが不思議な守護を頂き、無事小樽に着いた。この噂が小樽付近に伝わったという。三軒家の信仰は後に西大教会となる。ところで現在小樽に7カ所の西大教会系教会があるが、最も早い所が明治36年設立である。河内の布教によるのかどうか、今では西大教会でもよく分からないと言う。

さて、北海道の系統別教会数を見てみよう。北海道に1以上の教会を持つ95大教会の内、20カ所以上の教会を有しているのは次の通りである。

洲本54、雨龍50、秦野49、夕張48、敷島48、網走44、那美岐39、郡山34、兵神30、阿羽30、亀岡28、小牧26、豊岡24、湖東22、秩父22（立教173年版『天理教教会所在地録』より）。

続いて嶽東、津軽、蒲生、甲賀、幅下も20カ所に近い。最初に触れたようにこれが北海道伝道の特徴である。95もの大教会系統があり、さらにならなくさんの教会を持つ系統がこれだけ多いのは北海道伝道が全国各地から入ってきたことを物語っている。

具体的に教会名を挙げて話を進めよう。北海道で一番最初にできた教会は現在の雨龍大教会である。

明治22年、奈良県十津川村は未曾有の洪水に襲われ、甚大な被害を蒙った。家も畑も流された人たちは政府の斡旋で北海道に移住することになる。空知太（現滝川市）の粗末な屯田兵屋で越年し翌年樺戸郡徳富に入植、村名を「新十津川」とした。ここに入植した人の中に後の雨龍大教会長西垣定喜がいた。

西垣は明治22年、奈良県の十津川で30年来の身上の患いを助けられ信仰に入った。助けられた喜びは何ものにも代え難く、北海道へ渡ってから心強く残った。開拓の合間をみては病人を訪ね、自分が助けられた喜びを話して聞かせた。

明治25年までに100戸を超す入信者があり、明治26年9月に北海道で最初の教会として新十津川布教事務取扱所（現雨龍大教会）が設立された。西垣は入信した年に北海道へ渡ったが、布教のためではない。大災害に遭い、開拓のため北海道に入植した。そこで自らが助かったことを忘れず、次第に強い信仰心を持ち布教師になっていった。

現雨龍大教会ができたのは、日本の近代史に於いて北海道開拓が始まったこと、十津川に大洪水が発生したこと、そして北海道入植直前に西垣が天理教信仰を始めていたことが重なったからである。

北海道の天理教伝道初期は開拓と何らかの関係があって始まったものが多いと言ってよいだろう。（この稿続く）